

2022年2月20日 主日礼拝

説教題「手探りで歩む私たちの間で」ルカによる福音書4章14～30節

主任牧師 加藤 誠

「そこでイエスは、『この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した』と語られられた」（ルカ4章21節）

主イエスは荒れ野の試みを受けられた後、聖霊に満たされてガリラヤ地方の諸会堂で教え、神の国の福音を宣べ伝え始めます。すると人びとの間で評判が立ち、その噂がガリラヤ中に広がる中、主イエスは故郷のナザレに戻られたのですが、残念ながら、人びとは主イエスにつまづき、激しい反発を示したのでした。

人びとは何につまづいたのか。一つは「この人はヨセフの息子ではないか」ということです。マルコとマタイでは「この人は大工ではないか」「大工の息子ではないか」と人びとがつぶやいています。当時、大工は特別卑しい職業だったわけではなかったようですが、「会堂で聖書をひも解き、人びとに教える立場にふさわしいか」というと、人びとは疑問と反発を感じたのでしょうか。聖書を教えるにふさわしいのは、聖書を専門的に学んだ律法学者か、会堂長のような長老と呼ばれる地位にある者であって、「イエスのように若造で、専門的に聖書を学んだこともない、ただの大工ふぜいが、人びとを前に偉そうに説教するものではない！」という疑問と反発が生まれたのではないかと想像されます。

しかもこの時、主イエスはイザヤ書61章を朗読して、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と語られました。このイザヤ61章は「荒廃したエルサレムの町を新たに建て直し、貧しい人、打ち砕かれた心を慰め、不当に鎖につながれている人を解放するメシア（救い主）」に関する預言が語られている箇所です。「この油注がれたメシアとは、すなわち、あなたがたの目の前に立っているわたしだ」と主イエスが宣言されたのですから、きっとこの言葉もナザレの人びとの間に激しい反発を引き起こしたことでしょう。「何がメシアだ？何が神の子だ？俺たちはこいつの両親のことも知ってるし、こいつが子どものころからどんな風に育ったかも知っている！こいつが神の子、メシアなわけがない！」と。

もう一つは、主イエスの説教が人びとの罪を厳しく指摘し、えぐるような内容を含んでいたことです。今日の箇所では主イエスは預言者エリヤの時代のサレプタのやもめと、預言者エリシャの時代のシリア人ナアマンの事例を語っています。この二人は、預言者エリヤとエリシャの厳しい求めに対して、それぞれ服従する形で応答を示しました。信仰というのは、ただ神の言葉を聞いていればよいというものではない。「神様への服従が伴うのだ」ということでしょう。「この二人のようにあなたたちは神の言葉に服従して応答しているか？」という主イエスの厳しい問いかけは、ナザレの村人たちの信仰のプライドを深く傷つける言葉として聞かれたのでした。

当時、町々の会堂では安息日ごとに礼拝がささげられ、成人男性は誰でも聖書朗読の奉仕をすることができました。そして聖書を朗読した際に、一言コメントを語ることもゆるされていたようです。けれども主イエスの場合は、一言どころではな

い、見事な説教をされた。しかも、その内容は聖書の専門家である律法学者の及ばない見事なものでありつつ、人びとの信仰の内実を厳しく問いかけるものだった。それが人びとの憤りと憎しみを買い、激しい非難となって向けられたのでした。

そう見ていくと、このナザレの村の人々の姿というのは、私たちにとって決して他人事ではないように思えます。私たちは人の言葉を、ほんとうにフラットに、心低くして聞いているでしょうか。その人の肩書や職業、経歴や年齢に惑わされていないでしょうか。神さまは、いろいろな人をお用いになって、今日も御言葉を私たちに届けられます。たとえ目の前に立っているのが自分より年下であったとしても、たとえ粗末な身なりをした人であったとしても、いつ、どんな形で、どんな人を通して神さまは私たちに御言葉を語られているかわからない。私たちはその神さまの御言葉の前に、いつでも謙虚に聴く信仰が求められているように思います。

その点で大井教会の教会学校の働きはとても大切だと思います。今朝の巻頭言に先週の朝の祈祷会の様子を記しました。今、対面での礼拝ができない中で、イエス様を真ん中にまわって集いあい、それぞれ御言葉から受けた恵みや問いかけを分かち合えることはほんとうに大きな励ましです。先週の朝の祈祷会では使徒言行録 13 章から、異邦人伝道の拠点となったアンティオキア教会について学びあったのですが、このアンティオキア教会は、エルサレムで起こった迫害で散らされた弟子たちが逃げて行く先々で福音を語ったことで誕生した群れでした。迫害にあって逃げていく途中で主イエスを紹介していく。「こんな迫害にあうなんて、キリストはもうこりごりだ」というのが普通ではないか。散らされてバラバラになりながら、福音を語り続けることが自分にできるだろうか？…という思いが分かち合われました。その時、ふと思ったのです。今のコロナで共に集まる礼拝ができない状況というのは、このときバラバラに逃げていった弟子たちと似ているなど。「たった独りになって、何ができるんだろう？」と思う状況で、しかし弟子たちは主イエスを紹介し続けていきました。「今、共に集まれない中でできること」、「今だから、できること」。一人一人に伴ってくださっている主イエスの恵みを思うとき、それぞれの場所で今できることを考え、祈り、ささげあっていきたいのです。まもなく今年のお受難節、イースターを迎えていきます。一人一人が主イエスの恵みへの応答をささげたいのです。

今朝の箇所、イザヤ 61 章の御言葉が証しているのは、主イエスは「栄光のメシア」ではなく「苦難のメシア」として来られた方だということです。「栄光のメシア」とは華々しい活躍をして人びとの称賛を受けていくメシアですが、そうではなく、主イエスはこの世界で今、悲しみと苦しみの中にあり、なかなか神さまの救いを見いだせず、うずくまっている一人一人の傍らに寄り添い、その苦難をご自身の身に受けて歩む「苦難のメシア」として来られたのです。今日も世界中で「神さま、あなたの恵みはどこにあるのですか？」と叫ぶざるを得ない、手探りで歩む私たちの間に、主イエスは神の愛を届けるために来てくださった。その主イエスを大切にいただいて分かち合う教会として歩ませていただきたいのです。